

Newsletter 第3号 2003年6月

寄稿

「タイの大学を訪問して考えること」

小松 照幸 (名古屋学院大学)

今年の2月、一ヶ月間の留学引率でコンケン大学へ行って来た。ここは、バンコックから400キロ以上離れた、タイ東北部(イサーン地方)の広大な農業地帯にある中枢的総合大学である。大都会の喧騒と過密とはいまだ無縁な、伝統的なタイの地方文化都市である。この大学の敷地は優に1000エーカー(1 acre = 約1200坪)を超え、車で回れば30分以上かかるし、学生寮、教職員宿舎、大きなオープン・エアの食堂街、農学部の広大な実験農場、屋台あり、広大な学生ホールあり、速度はすこし遅いがインターネット・カフェありと、夜の睡眠時間を除いて、学生、教員、職員、地域住民のみんなに開かれたキャンパスである。大学の中に村があるような、こんなハチャメチャな大学は日本ではまずお目にかかれない。24時間稼働し生活感に溢れる大学は、ぜひ日本にも導入したい。2月の酷暑(3月・4月)の前に、南国の夜風に吹かれながら屋台で、シンプルでこくのあるラーメンを食べて日本のことや、文化の違いをいろいろ考える。日本のラーメン一杯分は、コンケン大学の一週間分の食費がまかなえる。また、お金持ちの豪邸は数百坪から広いものは1000坪以上もある。このタイ・短期留学プログラムは、今年で4年目であり、同僚と受入れ大学の担当教員の努力で、順調に運営してきた。4年間の引率はひとりでがんばってきたが、20名近い学生を一ヶ月面倒みると、さまざまなカルチャーショックや、緊密な集団生活により時として深刻な対人関係問題などの処理に、あるいは熱暑や辛い食事、睡眠不足による体力消耗などへの対応で随分と苦労させられた。学生達は約3週間の研修が終わり、残り1週間の大旅行に出発する頃には、タイの学生の親身のお世話に心が通い合い、別れる頃には両者ともども心からの感謝と感動で、涙する。引率の私から見れば、まさにアジアの学生同士が青春しているのである。

こんな体験の中で、色々と日本の暮らしについて考える。私は日本が好きである。戦後いろんなことをアウト・ソーシングした結果、便利で何でもある。衣食は間違いなく溢れている、がしかし、住はどうであろうか。持ち家率は先進国のそれとそう差はないようだが、土地資本主義のためバカ高い土地代と住宅費で、庶民は苦しんでいる。明治以来130年以上かけてきた日本の近・現代史は、豊かさの意味、国民の幸せの基盤をもう一度歴史的視点で考えるために、これまでの愚行を白日の元に晒し、皆で「100年の大計」を築かなければならない。もう、お上に全てを任せる時代ではないし、1万件以上の役所の許認可に関して、「官許」を求める時代でもない。あるべき「多文化の関係性」はマクロの文化とミクロの文化が、表裏一体であることへの深い認識が必要であり、これまでの、余りに大雑把なステレオ・タイプの社会政策は「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」へと根本的な政策転換をしなければならない。戦争は人の心から始まり、幸せも人の心から始まる。

特集 [私と研究テーマ]

「怒りについて多文化の視点から考える」

手塚 千鶴子（慶応義塾大学）

昔筆者の研究テーマは「甘え」であった。それは甘えてはいけないアメリカでの体験から生まれた。現在のテーマは「怒り」であるが、「甘え」と同様これにも異文化接触体験がかかわっている。大学での多文化間カウンセリングで、留学生の「怒り」の表現にとまどい、鬱屈した「怒り」で動けない者をどう援助するのか格闘してきたからである。しかしこの問題は現代日本の普遍的課題の一つではないか。

和を優先させ「怒り」を抑圧しがちな日本文化では、増大しつつある多文化接触や異文化コミュニケーションで生じる対人葛藤やフラストレーションを体験した時、自分や相手の怒りにどうつきあうかは大きな問いである。また「怒り」など感情表出が直接的な文化の人々には、「怒り」を抑える日本人は怖い存在になりうる。その視点からの分析も重要であり、文化変容に伴う日本人の間での世代差や男女差も興味深い。

本来「怒り」はコミュニケーションのレベルだけに限定されるべきではない。病理を考えれば臨床心理学や精神医学、「怒り」の破壊性と創造性は深層心理学的に、家族をふくめ社会集団がどう「怒り」を許容し封じてきたか社会的装置に着目すれば社会心理学や社会学、「怒り」を文化の視点で論じるなら、異文化間心理学、文化人類学、民族学等から分析できる。政治や外交での「怒り」も国際関係論、国際政治から研究できる。さらに「怒り」は個人のものであるんであれ、歴史の積み重ねがあり歴史的分析が必要である。まさに多様な領域から研究されうる。

また「怒り」は関係性のなかで生じ、しかも当事者間で対応できず外に零れ複数の関係をまきこみがちであり、その研究は多数の関係性を志向する。そこにさらに独立的にであれ異文化接触のように文化の相互作用の次元であれ、複数文化のかかわる研究をすれば、より複雑で多重的関係性の分析が肝要となる。

大枠はさておき具体的に第一には、筆者は大学での留学生と教職員間での「怒り」の気づき、それへの反応と対応をめぐるコミュニケーションの実態を記述し、それがどう展開し、どう収束し、どのような満足、不満があるのか、またそれぞれの立場から、どうしてそうなるのかについてどう認知や意味づけがされているのか、また今後のよりよい異文化コミュニケーションのために、どう対応するのか、その実現に何がネックでどうのりこえるのがよいかを分析したい。その際両者に、どのような共通性と相違があり、そこに文化と個人差の問題がどうかかわっているかを考察したい。第二にこのような現実場面をはなれ、留学生達の文化と、日本文化における神話民話等において「怒り」がテーマとなっているものを探し、そこで「怒り」がどう取り上げらどんな意味づけをされているかを分析したい。その上で多様な文化からの代表的な話を留学生、日本人の教職員に提示し、彼らの反応、意味づけを比較したい。第一の研究に多少とも厚みをあたえられる深層心理学的接近ができれば嬉しいが、どうであろうか。

「6眼モデル」

林吉郎（青山学院大学）

私は、6眼モデルと呼ぶインターラクティブなシミュレーション・モデルを中心に、それに関連する領域をかなり長期に亘って研究しています。これは、人間の知覚や認知、現実構成とそのコミュニケーション、システム構築などが、パラダイムの違いや文化間でどう違っているか。またその様な違いのインターアクションからくる矛盾のエネルギーは、リフレーミングの過程を通じて創造性のエネルギーに変換することができるものか、といった研究です。

このモデルを実践的にシミュレーション化することにより、これまで数年に亘っていろいろな形の多文化間で実験し、試行錯誤した過程から、参加者のマインドセットとスキルセットによって幅が出るものの、その創造的な効果は確認され始めています。この研究は、日本の経営や組織化原理に応用して考えることで、経営組織の国際比較や国際ビジネス戦略の研究ともなりましたが、私の問題意識は、つねにもう少し深いレベルの人間の特性（human nature）、心体知を含む生命体などを考えることにありました。

具体的には、現状認識、ビジョン、問題を多角的な6つの視点から相互関連的に発掘し、物語、隠喩描画、appreciative inquiry法などを使って創造的にリフレームすることにより、より想像性に富んだ発想を促がす。自分のパラダイムをシフトさせる超柔軟性を開発して、それを新しい想像性につなぐ。文化や個人の間「違い」をどうマネージし、それをどう創造的エネルギーとして異文化接触やビジネスに生かすかのファシリテーション・ノウハウを蓄積する、といったことが内容となります。Edward de BonoのSix HatsやSix Shoes、David BohmのDialogue、Milton BennettのFeeling, Forming Model、野中郁次郎のSECIモデル（暗黙知、形式知）などと似た点もありますが、基本的に違った面を持っています。

6眼シミュレーションと呼ぶのは、ダイヤモンド型に座ってインターラクトし、各辺が違ったマインドセットを代表することから、この名称があります。6眼とは、主体眼、客体眼、アナログ眼、デジタル眼、未来眼、過去眼を指します。ただやり方は多種ありますが、いずれも違ったマインドセット（眼）で現状、ビジョン、問題などを視てインターラクトすることにより、新しい世界が開け、創造性が高まります。これは、現実世界の多文化関係、多文化インターアクション、ダイバーシティ・マネジメント、ダイバーシティ・チームなどをシミュレートしているといえます。

書評

末田清子・福田浩子著

「コミュニケーション学：その展望と視点」 松柏社、2003年。

評者 宮原 哲（西南学院大学）

日本でコミュニケーションが学問としての第一歩を踏み出したのはいつか、ということを経験、研究に携わる方々にお尋ねすると、さまざまな答が返ってくる。西洋レトリックを弁論術として取

り入れようとした明治初期、とか、バーンランドが日米学生の自己開示を比較した頃、など。いや、まだ確立されていない、という考えもある。

家庭、学校、職場など人生のさまざまな場面での人間関係が複雑になってきた現代、実際に役に立つコミュニケーションのテキストが待ち望まれている。

本書は、コミュニケーション全般の特性とこれまでの研究で使われてきた代表的な視点を紹介するメタ理論的部分、言語に関する部分、非言語に関する部分にわかりやすく分けられている。それぞれの部分で、これまでに展開されてきた内外の、伝統的なところから最先端まできわめて広範囲な研究領域をていねいに引用、参考にされ、清田、福田両筆者は、固すぎず、柔らかすぎないコミュニケーション研究の紹介、解釈を展開している。

概論的な、特にコミュニケーションという広範囲にわたる領域でテキストを執筆するのは、膨大な研究分野からどの伝統、認識論、存在論などの哲学的視座を定め、そして具体的な理論、研究の中でどれを選ぶのか、という方向性を決定するだけでもたいへんな仕事である。著者は、これまでの研究者としての研鑽に加えて、コンサルタント、通訳、企業での経験を生かして随所に事例を使っている分、わかりやすく、説得力ある一冊のテキストとなっている。

日本ではコミュニケーション研究の歴史がまだ浅いので、ある程度避けられないことかも知れないが、英語と日本語が混在している部分が目立つ分、大学のテキストとして以外、一般の読者が手に取り、内容についてフィードバックすることがいくらか困難になっている点は否定できない。日本人の一般読者にとってもわかりやすく、役に立つテキストを著すことは、両著者のみならず、コミュニケーション研究と教育に携わる者一人一人が今後使命として取り組まなくてはならない課題である。

読みやすく、説得力がある、総括的なコミュニケーションの概論書を執筆してくださった、末田・福田両先生に感謝申し上げますと共に、この書を機に、多くの研究者が「日本人の日本人による日本人のためのコミュニケーション論の確立」にしのぎを削ることを祈念したい。

文献紹介

『エスニック・メディア』（白水繁彦編著、明石書店、1996年）

白水繁彦（武蔵大学）

エスニック・メディアとは、ある社会のエスニック・マイノリティのために運営されるメディアである。じつは定義付けるのはなかなか厄介で、本書執筆の後も、筆者自身、試行錯誤を続けている。その詳細については、拙著「エスニック・メディアの変容」『移民研究年報』第8号、2002年を参照されたい。

さて、本書『エスニック・メディア』は、日本に150タイトル以上存在する、日本で編集されるエスニック・メディアを扱っている。まず、白水が概論を担当。在日エスニック・メディアの社会的機能を検討し、集団内的機能と集団間的機能、そしてその発展形としての社会安定機能を析出している。集団内とか集団間とか分けてみたが、画然としているわけではない。たとえば、逸脱行動をした人を取り上げて罰したり、良いことをした人を誉めあげるといった賞罰機能は集団内的機能に

属するが、各エスニック集団内部で反社会的行動が減ると、結果としてそれは日本社会全体の安定につながるし、(「日本人」をはじめとする諸民族集団と当該エスニック集団の) 集団間関係も向上するだろう。

言語についても同様のことがいえる。エスニック・メディアの集団内的機能の重要なもののひとつが文化の伝承であり、とりわけ母語の継承維持である。ニューカマー向けのメディアはエスニック言語を用いる。たとえば南米スペイン語圏やスペイン出身の人向けにスペイン語の印刷、放送メディアがある。そうしたメディアの主たるターゲットは、スペイン語圏出身者だが、実際はかなりの数の「日本人」も利用している。スペイン語学習者たちが「生きた」スペイン語を学ぼうと契約しているのだ。こうなると、他民族集団のメンバーもスペイン語圏出身者の動向や考えを知ることになり、そのメディアは結果的に集団間的機能を果たすことになる。もちろん、最初から他集団の人たちと関係をもつために編集されたページをもつメディアもある。そのために日本語欄が設けられていたり、英語欄が設けられていたりする。エスニック・メディアで報じられて初めて日本の主流メディアが気付き、全国ニュースになることもある。

本書には中国人留学生だった段躍中氏の「政論新聞から生活情報紙、総合紙へ__中国メディアの変遷」や、ブラジルからの留学生だったアンジェロ・イシ氏の「デカセギ経験者の漫画から阪神大震災報道まで__ポルトガル語メディアの快進撃」、韓国出身のペク・ソンス氏の「最大のエスニック集団__コリアンメディア」など、自身がニューカマーである研究者が寄稿しており、大きな特徴となっている。

なお、『エスニック文化の社会学』（白水繁彦、日本評論社、1998）も、民族関係や文化要素の異文化間普及を扱っており、基本的に多文化関係学の各論であると考えている。

「青年海外協力隊員の帰国適応に関する基礎的研究」

平成13-14年度科学研究費補助金(萌芽的研究)研究成果報告書(近刊)

上原 麻子(広島大学)

学際的に研究されている異文化適応、帰国適応現象のうち、一般に、後者の方がより困難が多いと解されている。にもかかわらず、異文化に長期滞在した後に母国で経験する再適応過程の体系的な研究は多くない。とくに日本では国際ボランティアに関する研究は殆どない。本報告書が最初の体系的な研究ではないかと考える。

本報告書は、1) 最低2年海外赴任をした隊員が帰国後母国で経験する困難の主要因の解明、2) 途上国での任務が彼らの人格形成に与えた影響の調査を主目的とし、データ収集は以下の4グループから行なった。1と2のグループには面接、3、4には層別無作為抽出による質問紙技法を用いた。1) 帰国後8ヶ月～35年になる25人の元隊員、(2)進路相談カウンセラー延べ9人、3) 帰国後3年以内の240人の元隊員、4) 帰国後5～20年の27人の元隊員。対象者らの滞在国は約85のアジア、アフリカ、東欧、南米の途上国である。

対象者の多くが、語学力、他文化での活動能力を伸ばしてタフになって帰国し、半年から1年以内に日本社会への再適応を果たしている。しかし、母国で健康問題、心理的および対人関係の課題、就職問題等の困難にであった者もあり、それらの主要因は異文化滞在による価値観の変化であった。また、受け入れの日本社会にも課題があった。合衆国の平和部隊員が帰国後一般に社会が

ら肯定的に迎えらるのに対し、日本にはまだ国際ボランティアの2年を実績と見なさない組織も存在する。

そうした課題に遭遇した反面、帰国後半年～35年までの多くの元隊員らに、途上国における異文化接触が与えた最大の影響は、「日本人の人種観」(我妻・米山、1967)および日本的な「オリエンタリズム」(Said、1978)の止揚である。今日、「クレオール化現象」がともすると優位文化(例、米国文化)化になるのに対し、本調査はどのような文化に、どのような動機で接触するのかが、意識への異文化受容の内容を左右すると実証する。

文化接触の多様な心理に関する研究には、面接が最適であろうと「スノーボール」式にデータ収集を始めたが、モデル的人物に紹介されることが多く、カウンセラーへの面接と質問紙技法を追加した。報告書はまた、多文化接触をした対象者への質問紙構成の難しさなどについても論じている。

(本報告書の希望者はその旨と宛名・住所を葉書で筆者にお送りください。冊数に制限がありますが、7月頃に無料送付します。

葉書の宛先：〒739-8529東広島市鏡山1-5-1広島大学国際協力研究科)

「ハーバード流思考法で鍛えるグローバル・ネゴシエーション」

(総合法令出版、1,900円)

御手洗 昭治著

「グローバル時代の異文化との交渉の新しい潮流に焦点を当てた、企画的な一冊。交渉者の双方が満足を得るハーバード式交渉術を中心に、ミディエーションと呼ばれる調停、異文化間の商談、ビジネス交渉、ジミー・カーター元大統領のミディエーション手法、テロとの交渉の紹介をする。交渉下手の日本人が、国家レベル、民間レベル双方で、国際舞台ににおいて活躍するためにおいて、是非読んでほしい一冊(375頁)」。日本交渉学会会長 藤田 忠氏推薦

「交渉者双方の満足を重視するハーバード式交渉術の原則を分かりやすく解説するとともに、ミディエーション(調停)、各国の交渉スタイルと特徴、異文化交渉の心得も紹介。グローバル・ネゴシエーションにも大いに役立つ一冊。」(Global Manager, Vol. 13, p.3, 2003年5月10日号、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会)より

<本書の構成>

序章

第一章「交渉下手で理解されない国、日本」

第二章「交渉とは何か?日本人のとられる交渉と多文化のとらえる交渉」

第三章「ハーバード式交渉力とは」

第四章「交渉は雄弁に文化を語る」

第五章「異文化ビジネス交渉の向上法」

第六章「ミディエーションによる国際紛争解決の例」

第七章「テロとの交渉」と実践応用付録.

新刊紹介

『多文化社会と異文化コミュニケーション』

伊佐雅子 監修、三修社

目次

1. 空間、時間、異文化コミュニケーション-----池田理知子
2. 異文化コミュニケーターとしての通訳者-----灘光洋子
3. 異文化コミュニケーションと誤解の接点-----今井千景
4. 異文化コミュニケーションにおける言語選択-----吉武正樹
5. 「地球都市」の出現とコミュニケーション-----E. M. クレーマー
6. マスメディア(CM)と異文化コミュニケーション-----山田美智子
7. 障がい者、高齢者とのコミュニケーション-----岩隈美穂
8. 女性と異文化適応 - 日本人母親の場合-----伊佐雅子

『「われわれ」の文化を求めて

--民族・国境を越える「エスニック」・エンターテイメント』

科研費（平成12 - 14年度）成果報告書（白水繁彦編）

目次

序 ----- 白水繁彦

1 関西在住フィリピン人のエスニック・エンターテインメントとエスニック・メディア----- 中野克彦

2 海外在住ベトナム人のメディア・エンターテインメント～在日ベトナム人社会における受容～----- 日吉昭彦

3 エスニック・メディアとエンターテインメント～在日ブラジル人メディアの事例を中心に～----- 白水繁彦

4 在日ブラジル人にとっての音楽と芸能活動の意味と意義～”デカセギ移民の心”を歌ったCDとその制作者の事例～----- アンジェロ・イシ

5 「俺たち/私たちの音楽」をめぐる困難～エイジアン・ブリテッシュの事例を中心に～----- 五十嵐泰正

6 海外に展開する日系パフォーミング・アート～米国・カナダにおける舞踏（Butoh）の事例～----- 蕪木寛子

7 日本・アジアのポピュラー文化の変化とメディア実践----- 水越 伸、ペク・ソンス、崔銀姫、劉 雪雁

特装版を実費にてお分けします。詳細は shige@cc.musashi.ac.jp へお問い合わせ下さい。

多文化関係学会 第5回理事会 議事録

2003年3月7日（金）午後1時～7時 於青山学院大学 総研ビル第14号室

出席者：石井敏、石井米雄、岡部朗一、久米昭元、小林登志生、小松照幸、杉本裕二、杉本なおみ、手塚千鶴子、徳井厚子、林吉郎、和田純 理事12名 掛札綾（書記）

< 議題 >

報告事項：

1．前回議事録の確認

林副会長が前回議事録の大会基本構想の部分を報告した。

2．事務局報告（会員数、タスク活動、財務状況その他）

現在会員数が180名であるという報告に対して今後円滑な運営のためには250名から300名程度の会員数が必要との指摘があった。

審議事項：

1．学会名（英語）について

林副会長から学会の英語名についてinterculturalの部分をmulticulturalにしてはどうかという提案が出され、多数決の結果、JSMR（Japan Society for Multicultural Relations）とすることとした。

2．学会誌名（英語）について

杉本なおみ理事から学会名変更に伴い学会誌名について日本語名は「多文化関係学」、英語名はStudiesを削除して「Multicultural Relations」としたいという提案があり、了承された。

3．ニュースレター次号の編集について

徳井理事から「ニュースレターをニュース中心のニュースメールとフューチャー中心のニュースレター、ホームページの3つの方法にし、ニュースレターは印刷物とすることが提案され、了承された。次号NLは6月末発行予定である。

4．ホームページの更新について

次回持ち越しとなった。

5．第2回年次大会に向けての基本構想について

年次大会をどうしていくかについては次のような議論がなされた。

石井米：学会の場合は、分科会で行うのか、全部が参加するのかについて明確にしておいた方がよい。学会の運営ストラテジーを考えないといけない。

小松：「多文化研究に貢献する内容」が必要。

岡部：この学会固有の独特な視点として多文化的な視点、関係性の視点、超領域性の視点が必要。

単なる分科会ベースではなく、相互の関係性が必要。

小松：この学会が定義する文化とは何か、関係性とは何か、それが見えないから第一回大会シンポジウムでのスピーカーへの依頼内容も明確化しにくかった。

石井米：毎回テーマを決めて、委員会の側が主体性をもって行うことが必要。

手塚：しかしながら、一方で会員数を増やさなければならないし、発表の数も必要。教育的な意味をもった発表もあるという2本立ての形はどうか。

石井米：小さいグループを作っていく努力が必要。多文化関係学を作ろうという強烈な意志を示す必要がある。

石井敏：今後の方向付けになるようなテーマを決めてから、それにふさわしいようなシンポジスト等を決めたい。

岡部：3つの視点（多文化性、関係性、超領域性）を奨励した研究を行っていきたいという事を示した方がいい。発表30分、レスポネント20分はどうか。一つのテーマをレスポネントが3方面から串刺しにするという形が理想的。

6．第2回年次大会研究発表の募集について

次回持ち越しとなった。

7．学会誌発行の基本方針、投稿規定、発行時期などについて

杉本なおみ理事から学会誌のデザイン、予算、発行時期、作業日程などについて説明があり、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所の協力を得て準備作業を進めることになった。11月30日で原稿を締め切り。5月発行(予定)ということで合意した。ホームページには3月中に執筆要項を含めて案内を流すことになった。特集については編集委員会で継続審議事項となった。

8．関西地域における新理事の推薦について

前回理事会合意に基づき神戸商科大学教授の松田陽子氏に理事を依頼し、了解されたことが報告された。

9．年次大会までの研究会、ワークショップ等の開催について

6月に「日本における多文化共生と人権問題-人身売買の受け入れ国として-」というテーマで東京で研究例会を開くことが久米副会長より提案された。

10．第3回年次大会の開催校について

次回持ち越しとなった。

11. 寄付金の使途について

次回持ち越しとなった。

12. 多文化関係研究の5つの主要領域について

御手洗理事の提案（異文化交流史、国際交渉論等）は設立趣旨の関連領域の第五番目の地域間関係の中に含まれているため、そのことを同理事に連絡することとなった。

13. その他

広報関係について

杉本裕二理事から、学会への問い合わせについて、会員から直接担当理事に連絡できるようにしたいとの提案があり、委員会の代表者のみに転送することになり、HPで公表することになった。

13-2. 全会員宛同報E-mail

広報担当（杉本裕二）が最新の会員名簿に基づいた全会員のE-mailを持つことになった。

<ワーキンググループでの討議>

理事会終了後理事会の委嘱を受けて残っている理事（小林、小松、林、杉本な、杉本裕、和田、久米）でワーキンググループとして議論が継続された。その議論は次の通り。

一つの方向性として、グローバリズムの動きに対してしてアジアにおける地域主義の動きが多文化関係の視点から見ていくとどうなるかといったことが大会でも扱えるのではないかということが議論された。次回の理事会は6月7日（土）午後3時から青山学院大学で行うことになった。同日、学会の研究例会として青山学院大学で午後1時から立教大学助教授甲斐田万智子氏を招き、「多文化共生と人権問題—人身売買の国として—」を実施することが基本的に合意され、実施に向けて準備をすることになった。（以上、文責久米）

関連学会情報

第10回多文化間精神医学ワークショップ

テーマ：「日本人にとっての怒り - 多文化の視点から問う」

日時： 2003年9月27日（土）13:00～17:00 会場： 慶応義塾大学三田キャンパス北館ホール
入場料：1000円

連絡先：FAX: 03-5427-1638 TEL: 03-5427-1444 Email: ctezuka@ic.keio.ca.jp

公開研究会

メディア教育開発センター（NIME）主催、多文化関係学会、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科共催

テーマ：「異文化間の遠隔教育交流における文化・言語障壁に関する問題」

日時： 2003年9月2日（火）13：30～16：00 会場： 立教大学

連絡先： FAX: 043-298-3224 TEL: 043-298-3422 Email: off811@nime.ac.jp

編集後記*****

ニュースレター第三号が出来上がりました。今回はホームページ上で掲載いたしましたが、今回は印刷物として学会事務局の協力のもと皆様のお手もとにお届けすることにいたしました。昨年本学会が発足してから約1年がたとうとしていますが学会の体制も少しずつ整いつつあります。今回は、今年度の学会のお知らせ、学会誌投稿規程等のお知らせと共に、会員の皆様の「顔」が少しでもわかりやすくお伝えできるよう、「私の研究」「書評」等の特集を組みました。今後ともNLが会員相互の啓発の場となるよう努力してまいりたいと思っております。ぜひともこれからも皆様にご協力いただきますよう、お願い申し上げます。ニュースレターに関するご意見、ご希望、新刊情報など情報がございましたらぜひ下記宛にお寄せください。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

徳井厚子 灘光洋子（NL編集委員会）

jsmrnl@nime.ac.jp